

イリヤス・コズバエフ著

カザフスタン史学史 歴史の教訓

宇山 智彦

歴史学の基本が一次史料の研究にあることは言うまでもないが、外国史研究の場合、実際は現地の学者の書いた文献に少なからず依存せざるを得ない。ところがソ連など社会主義諸国では、歴史研究はその時の政治状況に大きく左右されてきた。そのため研究書や資料集を読む際、それが発行された時に歴史学と歴史家が置かれていた状況を知らずにいると、重大な読み誤りを犯すことになりかねない。幸いソ連に関しては、各地域や問題群別に出版されていた「史学史」が、歴史学の歩みを知るのにある程度役に立つ。しかしこの史学史自体、公式見解に縛られ、タブーとされる多くの事項を排除していた。史学史の「空白」を埋める作業の本格的な開始は、ペレストロイカ期を待たねばならなかった。

カザフスタンなど中央アジアでは、史学史を含む歴史の見直しは、「民族」をめぐる問題の見直しと大きく関わっ

ている。それだけに歴史家には、新しい視角と方法論に基づいて自民族の過去の復権を図りつつ、民族主義的な感情に流されず史料に立脚した冷静な検討を行う、知力と良心が要求される。ここに紹介するのは、そうした困難な課題に意欲的に挑戦した著作である。ちなみに著者は、カザフスタンの歴史の見直しの中心的なオルガナイザーであるマナシュ・コズバエフ氏（カザフスタン共和国科学アカデミー歴史・民族学研究所所長）の子息であり、現在カザフ国立大学上級講師を務めている。

それでは、本書の目次と内容を紹介していこう。

序

第一章 十月の突撃、我々はいかなる遺産を拒否して

いったのか

第二章 学問の形成 二〇年代を見つめながら

第三章 『小教程』への道で

第四章 ベクマハノフ物語

結び

注

序章で著者は、今日、歴史への人々の興味が高まっている一方で、社会の現状や歴史の歪曲への責任を歴史家に押しつける傾向があると指摘する。歴史家の道徳的責任を考

えるためにも、歴史学の経験とその成功、失敗を意味づけなければならぬ。本書は、一九二〇―一五〇年代のカザフスタンの歴史学の発展を概説し、歴史学の「減速のメカニズム」がどのように出現したかを、理論、政治、実践の三つの断面から示すものである。

第一章はロシア革命前後の時期を取り上げ、歴史学の「継続性」と「革命性」の問題を論じている。従来、カザフスタンの歴史学は一九一七年に出発したとされ、革命前の歴史学は、史実収集の面でのみ価値がある、植民地主義的なものだと言われてきたが、これは一面的な評価である。革命前のカザフ人の文化水準も低く評価され、識字率は二%とされてきたが、最近の研究によれば一〇%以上であり、カザフ語の本も計二〇〇万部以上出版されていた。一方、知識人の数が従来過小に算定されてきたことは、アラシユ党への評価と関係している。若い知識人達が作り、自治政府「アラシユ・オルダ」の中心となったこの党は、内戦期にポリシエヴィキと戦ったため極めて否定的に評価されてきたが、基本的には、自由主義と反植民地主義を掲げた民族政党として位置づけられるべきである。

民族の遺産の良い面を利用するレーニンの賢明な政策によって、バイトウルスノフらアラシユ・オルダの元指導者がソビエト政権側に引き入れられたことは、文化建設の発

展を促した。教育・学術機関の整備が始まり、中央アジア共産主義大学などが多くのカザフ人を受け入れた。キルギズ（一九二五年までロシア語・西欧諸語では、カザフを誤って「キルギズ」と呼んでいた）地方研究協会は地方研究の最良の伝統を復活させた。また、中央アジアにはもともとと図書館がなく、帝政期や革命・内戦期にも文書の管理が悪かったが、隣接地域からの援助を得て、カザフスタンの図書館建設が進められた。

第二章は、一九二〇年八月のキルギズ自治共和国成立から話が始まる。カザフ人は史上初めて民族国家を獲得したが、民衆に十月革命の意味を理解させる政治宣伝は困難を極めた。カザフ人共産党員の数も教育水準も不十分な状況の中で、知識人勢力である元アラシユ派を政治宣伝などに参加させるべきか否かが激しい議論を呼んだ。

二〇年九月、ロシア連邦のイストパルト（十月革命史・共産党史資料収集・研究委員会）が発足した。イストパルトが二一年一二月に党中央委員会の管轄になったことは、学問の自立性を損い、のちの歴史学のスターリン主義化に道を開いた。カザフスタンでは二二年にイストパルトが創立される。アカデミー諸機関もカザフスタン研究の規模を拡大した。図書館建設のテンポも速まったが、職員的能力より政治的信頼性の方が重視された。

中央から送られた活動家を社会主義的知識人の最初の核としながら、新しい専門家の養成が進められた。専門家の需要が大きいため、現実的条件を考えずに中・高等教育機関を増やそうとして失敗する例もあつた。次第に民族カール（幹部）養成優先の原則が固まり、各地域や民族に高等教育機関の入学枠が割り当てられた。知識人が少ないため、アスフェンディアロフのように、党活動から様々な学問の研究・教育までを兼務する者もいた。

著者はここで、二〇年代のイデオロギー状況の見直しに取り組む。社会主義建設は諸民族の革命的熱情と知的潜在力を結合させ、タタール人スルタン・ガリエフが民族問題の革新的理論家となつた。しかし彼は二三年に批判され、その時のスターリン演説は、その後の民族主義批判の基盤となつた。カザフスタンでは、特に二五年にゴロシチョーキンが第一書記になつてから、状況が緊迫した。

トローツキイは二七年三月、ゴスプラン副議長ソコリニフ宛書簡で、二人のカザフ人党員に会つたと書いている。それによると彼らは、後進地域に投資すべきなのに中央が反対していること、カザフ人は土地革命の魅力でソビエト政権側に立つたのに、中央は移民を送り土地を奪っていること、中央から派遣された党員がカザフ人党員の成長を認めず、両者の間に壁があること、ただしカザフ人にも

様々な立場のグループがあること、ゴロシチョーキンのロシア人村の扱い方とカザフ人村の扱い方が違うこと、などを語つた。

トローツキイと会つたのは誰だろうか？ 著者は当時の有力なカザフ人共産党員達の名を挙げて検討し、サドワカソフとムンバエフだろうと結論づけている。スターリンの支持を取りつけたゴロシチョーキンらの二人への攻撃と二人の反論の経緯を丁寧に跡づけた著者は、サドワカソフとムンバエフが、レーニンの民族政策を求めて手を尽くしながら成功せず、最後にトローツキイを訪ねたのだろうと推測する。二〇年代には異論に不寛容な雰囲気が生まれており、中央から遠い地域で特にそうだった。

次に著者は、再びアラシユ派問題を検討する。二二年、党中央委キルギズ・ビュローの決定で、元アラシユ派の大部分が最高国家機関を追われた。二七年、ボチャゴーフは冊子『アラシユ・オルダ』の巻末で、サドワカソフらの発言とアラシユ派のテーゼを併載して、両者の類似性を指摘しようとした（結局削除された）。同年、ゴロシチョーキンはバイトウルスノフの指導するアカデミック・センターを激しく批判した。「科学的審判」として出されたのが、マルトウイネンコ編の資料集『アラシユ・オルダ』（二九年）だったが、この本はアラシユ派の抑圧を目的とした歪

曲に満ちていることが、近年明らかになった。

以上のように二〇年代の歴史学はプラス面とマイナス面を持っていたが、いずれにせよ、様々な立場の学者が熱意をもって学問の基礎を築いたのである。

第三章はスターリン時代を論じる。歴史学における個人崇拜が始まり、行政的指令的システムに屈伏したベテランの学者達も、「紅衛兵」たる若い学者達もこれに加担した。カザフスタンでは、ゴロシチョーキンの着任まで本当の共産主義組織はなかったという説が普及させられた。「ブルジョア民族主義」への攻撃が強まり、一九三〇年、バイトウルスノフ、ドゥラトフら多数の知識人が強制収容所に送られた。

さて、三二年にソ連邦科学アカデミー・カザフスタン基地（三八年、カザフ支部に改称）が設立された。また三一年にカザフスタン・マルクスレーニン主義研究所が創立されたが、この研究所の壮大かつ非現実的な規約（全文が本書に引用されている）は、この時代の革命的性急さを表している。共産主義大学、カザフ国立大学なども開学した。各研究・教育機関では、様々な民族の出身の学者や、流刑でカザフスタンに来た有名な学者（バフルーシン、タルレ、チャヤーノフなど）が活躍し、当地の社会科学者の成熟の触媒となった。一方、文書館は三八年から共和国内務

人民委員部の管轄になり、創造的・学問的雰囲気にかわって軍事官庁の体制に支配されることとなった。

学問の政治的中立を主張した教授、革命前の高等教育機関を讃えた者、牧民の強制集団化は有害だと唱えた者などが批判された。三三年にゴロシチョーキンが更送され、一時的に自由化が行われたが長続きしなかった。三七年、敵・スパイ摘発キャンペーンが行われた。多くの知識人が「民族主義者」「トロツキスト」「日本のスパイ」などとして処刑されたが、中でもアスフェンディアロフは、アヒンジャンノフら教え子により「摘発」された。レーニン、スターリンの著作の誤訳一つで人民の敵とされる時代だった。

三八年、『全連邦共産党史小教程』が出た。翻訳を含め四二八二万部発行され、スターリン崇拜の百科辞典とも言われるこの本には、民族共和国、特に中央アジアへの言及が少なく、一方で反レーニン・グループの中には必ず民族主義者が挙げられている。社会科学は『小教程』の一字一句に沿った研究を使命とされ、知識人はアルファベットも知らぬ人々に『小教程』を教えるのを義務とされた。ちなみに当時の識字率は水増しされていた。

再びアラシュ運動史の問題を見よう。三三年に行われた、アラシチュールダ史をめぐる討論会は民主的だった。しかし三五年にフライニンとシャフィロが『アラシチュール

ルダ史概説」を出すと、「アラウダ」紙が、付録としてアラシユ党綱領や指導者の發言を取めているのは、反革命文書を合法的に配布させる行為だと批判した。党地方委員ユローはすぐこの本に制裁措置を取り、既刊のマルトウイネンコ編の資料集をも発禁にした。

以上のように歴史学は政治化し、行政的指令的システムを擁護する役割を担った。

第四章はこれまでの章と違い、著名な歴史家エルムハン・ベクマハノフ（一九一五—一六六）の悲劇と彼の代表作の運命という、一つの事件に焦点を当てている。

第二次大戦中の一九四二年晩秋、アルマアタに、ドルジーニン、パンクラートヴァら、モスクワの錚々たる歴史家達が疎開してきた。彼らとカザフスタンの学者が集まり、『カザフ共和国史』執筆のための委員会を作った。執筆陣は、戦う赤軍兵を鼓舞するためにも、カザフスタンのロシアへの併合は「最小の悪」だったという三〇年代の理論を退け、カザフ民族の解放闘争や、ツァリイズムの植民地政策と社会主義との差異を強調することで一致した。ベクマハノフはケネサル・カスモフの乱（二八三七—四七）の章を担当した。

四三年六月、ソ連で最初の本格的な共和国史である『カザフ共和国史』が出版され、すぐにスターリン賞候補にな

ったが、審査会で、ある老教授が、反ロシア的な本だと批判した。

四四年以降、歴史全体でロシア人に指導的役割を与え、ツァリイズムの政策を弁護する傾向が強くなった。四五年、『ポリシエウイーク』誌が、『カザフ共和国史』は民族解放闘争と、近隣諸民族への封建的・強盜的襲撃とを混同している」と批判すると、カザフスタン共産党中央委は追隨し、同書の改版を決めた。

四六年八月（いわゆるジダノフシチナの開始）から、イデオロギー状況は更に緊迫した。同年一〇月、ベクマハノフは論文『二八二〇—四〇年代のカザフスタンのカザフ人初の歴史学博士になった。しかし嫉妬した者の中傷により、正式承認は二カ月延びた。

四七年末、ベクマハノフの著書（博士論文と同名）への攻撃が始まった。四八年二月、ソ連邦アカデミー歴史研究所で彼の本に関する討議が行われ、アイダロヴァらが彼を批判したが、討議自体は民主的で、ドルジーニンらが批判者達の議論の粗雑さを指摘した。議論の中心はケネサル・カスモフ運動の評価の問題だった。

四八年七月一四—一九日、カザフ共和国アカデミー歴史・考古学・民族学研究所で新たな討論が行われた。ショインバエフはスターリンの「封建的・君主制的民族主義」

論を引用しながら、ベクマハノフはブルジョア民族主義者によるケネサルの評価を引き継いだと主張した。シャーワマトフは「モスクワの学者はベクマハノフを弁護するが、カザフ共和国史は我々カザフスタンの学者の方がよく知っている」と発言した。一方ブドヴニツは、カザフ人は解放闘争で「諸民族の牢獄」の粉碎に貢献したことを誇るべきだと述べた。最後にベクマハノフが立つて、批判者達がケネサル運動の歴史的条件を無視し、ツァーリズムの植民地政策を名誉回復させていることを厳しく指摘した。彼はその後、批判者達の名誉欲と創造上の不毛を批判した。

五〇年一二月、「ブラウグ」紙は、ベクマハノフを弾劾するシヨインバエフらの記事を掲載した。これにはもはや抵抗の手段はなく、ベクマハノフは党に自らの誤りを認める手紙を出したが、「民族主義者」「人民の敵」という非難には反論した。弾劾記事・集会、党の会議での批判が相次いだ。だが、批判を拒否する学者・党幹部もいた。

五一年一〇月、ベクマハノフの学位と教授称号が抹消された。アカデミーと大学をも追われた彼は、地方の学校教師となった。翌年九月に逮捕され、懲役二五年を宣告された。

五三年九月（スターリン死去の半年後）、宣告は撤回されたが、名誉回復・復職はならなかった。しかしベクマハ

ノフは、パンクラートヴァらの援助のもとに『カザフスタンのロシアへの併合』を書いた（この本では彼は批判を全面的に受け入れて、ロシアへの併合の進歩的意義を謳い、その上皮肉にも、彼の批判者だった数名を、各々が研究するカザフ人の反乱の反動性の認識が足りないということに批判しているが、本書はそのことには触れていない）。彼は五八年に学位と教授称号を回復し、一つの学派を作るに至った。

個人崇拜は民族知識人の最良の部分の抹殺し、その自然な世代交替と知的自然淘汰を乱し、行政的指令的システムを利用してのし上がった者による地位の独占を招いたのである。

結びは全体のまとめを兼ねている。革命前の遺産と、革命後の困難な時期に開始された文化変革は、共に正当に評価されるべきである。二〇年代以降マルクス主義の創造的原理は失われ、密告の横行の中で精神性と人間関係が墮落した。五六年のスターリン批判も徹底しなかった。減速のメカニズムの解体は我々にかかっている、と著者は訴える。

本書は、未公刊の史料（ベクマハノフの著書をめぐる討論など）を豊富に使い、西側で出た資料集（トローツキイ

の手紙)も利用して、生き生きとした叙述を組み立てている。著者が新しい目で見直そうとしている対象は数多い。まず「ブルジョア民族主義者」とされてきた革命前の知識人の存在をクロースアップし、三〇年代以降最近まで研究が皆無だったアラシユ党の問題に、再三言及している。また二〇年代の文化建設についても多面的な理解をしており、革命前との連続性や、人的・物的基盤の欠如の中での試行錯誤の過程、スターリン主義的な抑圧の萌芽を具体的に描き出している。本稿では紙幅の都合で十分紹介できなかったが、研究・教育機関の制度史的な分析を史学史に有効に組み込んでいることも、本書の特色である。

最も興味深いのは、ベクマハノフの事件である。これは、ソ連の文化・学問をイデオロギー的に統制し、のちの時代にも大きな刻印を残した「ジダーノフシチナ」(日本では研究が少ない)の鮮やかな一断面である。この事件を、単に大ロシア主義的な勢力によるカザフ人歴史家の弾圧と考えてはならない。ベクマハノフ攻撃の先頭に立ったのは主にカザフ人であり、モスクワの一流の学者は彼を擁護していた。しかも露骨に反モスクワ的な発言をしたシャーフマトフは、名前から見てもロシア人だろう。対立の構図は複雑である。この事件については、既に二十年余り前に、アメリカのテイレットが著書の中で鋭い分析を呈示し

ていたが(Tillett, Lowell, *The Great Friendship*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1969.)、コスバエフは新資料を利用し、事件の経過全体を明らかにすることに成功している。

ただ、歴史学の「減速のメカニズム」の解明の必要を説き、それに役立つと思われる興味深い事実を多く示しながら、結局「行政的指令的システム」「歴史学の政治化」などの言い古された言葉で学問の停滞の原因を説明しているのは、著者の分析の甘い点だと言わざるを得ない。中央が発する抑圧的な指令が、カザフスタン側の人間関係の中で一層複雑かつ残酷な形を取って実行されていくさまが、事実によって示されているが、それを構造的な把握の中に組み入れる必要があろう。またベクマハノフなど、著者が肯定的に評価する人物の考え方は良く表現されているが、彼らを批判した人々の動機——恐らく「減速のメカニズム」に直接関係のあるもの——は必ずしも明らかにっていない。しかしこれらは、先駆的・意欲的な試みにつきものな欠点であろう。レーニンが良いがスターリンが悪かった、という図式から脱却し切れないのも、執筆時期を考えればやむを得まい。

本書には、歴史家および知識人全般の地位と責任に対する深い関心が、一貫して流れている。それは著者自身の責

任感・緊張感と響き合い、読者の心を打つ。重苦しい話の多い本であるにもかかわらず、読後感は不思議と心地よいのである。

一九九一年二月、カザフスタンは独立し、歴史学も新しい局面を迎えた。著者は十月革命後の時期について、学問の「革命性」と「継続性」の結合の必要を説いているが、この考えは、新しい資料・方法論の導入とソビエト期の遺産の活用を必要とする今の状況にも当てはまるだろう。カザフスタンの歴史学のますますの発展を祈ってやまない。

(Kozybaev, I. M., *Istoriografija Kazachstana: wroki istorii*. Alma-Ata: Rauan, 1990. 136p.)

マジド・ハサノフ著

ファイズツラ・ホジャエフ

帯谷 知可

ファイズツラ・ホジャエフ *Faizulla Xojjaev* (露 *Faizulla Xojjaev*) とはどんな人物だろうか。例えば、『ソヴェト大百科』(一九七八年)では次のように解説されている。『ファイズツラ・ホジャエフ 一八九六年生まれ、一九三八年三月一五日没。ソヴェトの国家および党の活動家。一九二〇年より共産黨員。ブハラの商人の家に生まれる。一九一三年からジャティード運動、一九一六年から青年ブハラ運動に参加。一九一七年、青年ブハラ党中央委員会メンバーとなる。一九一七年の十月革命の後、ソヴェト・ロシアのポリシェヴィキと緊密に接触。一九二〇年一月に青年ブハラ革命家トルキスタン中央ビューロー議長、八月に革命委員会議長となり、ブハラ・エミールに対する人民の武装蜂起の指導者の一人であった。一九二〇〜一九二四年、ブハラ人民委員会議長および共産党中央委員会メンバー。一九二二年よりロシア共産党(ポリシェヴィキ)中